



二百十一冊、内

釣  
 清水 澗谷 澗江 澗川  
 鹽田 鹽谷 澗入  
 畧譜

庫	文	閣	内
三	三	三	和
六	六	六	書
〇	〇	〇	類
八	八	八	
八	八	八	
架	冊	號	類

内閣文庫	
番號	和 36084
冊數	211 (188)
函號	156 17

共七

名德院殿清代



清水

源姓

家茂

九二二  
空相夜藤

山石鳩流石出持部能備男世及郎

查改慈願初清水

平丸美

始住丸平二帝



恒豊

始撰改

神心名家文の字中々但し周備

記録御用所

仙舟使節使後播磨兵部少輔  
八國の守護蔵より天正の以家  
但る因幡の西園とち後一  
竟無の但るの石を後一  
倭より入道豊國と因幡の名を取  
ての西園と因幡の石を後一  
ふも羽葉後前も秀吉の命  
正八年九年のちも但国を列と  
らましつゝ後一

正八年九年の幕下  
其の分りて今方米三石の判物と  
と後豊國

正八年九年の幕下

東照宮の正八年九年の幕下  
何年正八年九年の幕下  
正八年九年の幕下  
正八年九年の幕下  
正八年九年の幕下

二斗合力の沙汰とほりり元和元年  
正月七日と大府を以て城せりて戦所  
大進路を懸いそぬる子平と帝恒置と  
付い活去く系約一條のたつと宗族なり。  
是應父山名大進路恒置は侍下家人  
清水平左衛門正親とらふもの世に

東照宮にまたしとて山名家のかたにえ  
祖田代のよきなるはかへ浪人くく一條を  
宗族とらふ宗平と帝恒置ととも

さねとのまじり活分と平と帝よりり少  
てなり

清國家(五)とてはとて成程のく二條  
の河原ゆく平と帝

東照宮に相湯とゆりたりえ和と平と月  
号

名徳傳教とよかれば彼の清水の更願と  
 equal 平と帝の代と平と帝よりりたり  
同元年正月とら大府苗とて清水の平

左馬頭恒豊は後醍醐天皇の宣永十年並加秩比呂  
流し合々口首に宿七石の領地と物に寛  
文元年六月朔日大西首組以二月二年  
十二年十二月加秩比呂依の定宝元年二  
月九日病中少老傳組以合月七年有  
十六日死七福武蔵は平山日向龍無事  
葬

先祖少老傳少老時氏

後醍醐天皇より福永の倫有代お傳

かく為る豊の倫有と稱せし恒豊初親  
の所家系より下りて後醍醐天皇  
おまらりし所中厚は流しとす

恒豊史 江牛の物

豊勝

寛永十九年九月廿七日訃を宣へり

大西首の宣を合二年六月七日死は格を

嵐市谷長龍寺小齋

量重

平次席

寛文五年十一月昆廿九日廿九日 〇日六年

二月廿九日死

時信

左之席

父初左信の事切ると伺いお家より

量頼

平次席 江店之物 傳右席

江量改量武

寛文五年二月八日初見の月五年十月十  
九日京性組の月六年十二月廿九日之信  
と伺ひ寛文七年七月廿九日半七名家  
督才孫次席有量より石分初〇月八  
年一月廿九日為と伺ひ之信又年二月  
十日死に拾八歳同寺小齋

豊後

石馬 初九門

之儀六年十二月九日書院南の同寺  
二月三日儀と物つ日本初いしるすた家督より石  
平八郎豊常に此白石と分りとの家  
之年八月廿六日死に後年同寺に葬

豊中

平八郎 初九門

寶酒井左衛門守景二男

宝永元年十月家督より山重清の享保  
元年四月十日死に後二年同日寺に葬

豊春

共儀 政任曹存

享保元年十月廿日家督より山重清の同

二十一年七月十二日小姓廻の之文二年  
二十一年七月十二日小姓廻の之文二年  
二十一年七月十二日小姓廻の之文二年  
二十一年七月十二日小姓廻の之文二年  
二十一年七月十二日小姓廻の之文二年  
二十一年七月十二日小姓廻の之文二年  
二十一年七月十二日小姓廻の之文二年  
二十一年七月十二日小姓廻の之文二年  
二十一年七月十二日小姓廻の之文二年  
二十一年七月十二日小姓廻の之文二年

二百信之始曰六年六月廿百死守之  
或曰守之始

豊信

一

宝曆九年二月廿八日初見の女小女  
十二月十九日書後始の宝文二年七月  
廿九日結婚の日三年十月廿七日病歿  
宝文二年八月廿九日改仕



豊道

山二席

和豊堂

寛政六年二月廿一日  
寛政六年二月廿一日  
寛政六年二月廿一日

嚴有院殿帝代



清水

源姓

二百零石

寛政九年  
三月  
相模  
後條

清水平左衛門恒豊之男

孫次郎 始太師之席 二席也

安右衛門

有豊堂

寛文元年七月廿六日  
初見之日七年  
初見之日七年  
初見之日七年

元年十二月廿六日新田番又権左衛門  
日七年七月廿六日分りお知百石納され  
またの慶永のころい百石納云今も  
又権左衛門の喜保二年十二月  
後番の頃の同又年九月廿日死市谷長  
龍寺小葬

豊秋

七郎大進

寛政八年八月定結書

宝永二年二月又日養子○月六年日  
月六日大田吉保又年十二月日  
家名○月九年十二月廿二日係在番  
りく死京坂水子御色長を寺  
小葬

時庸

反多清 初又二部 七郎

實の公名十部在集の時也 男

享保六年二月百家傳小書信子同十  
八年十二月廿日大書信の寛文二年  
二月廿九日大書信組以の西和九年十  
月十九日死に指し歳市谷長法寺葬

左多高 初平三席

時良

宝曆六年九月初日初人の西和之奉

同十二月十六日書院番の安永六年四月  
月之信子の西和二年二月廿日初しより  
大の上院可服存候のりは及の同奉  
十月廿日吹上御村上院なる物存候のり  
この及の同奉十一月廿日御村上院上院  
同十日全之及存候のりは及の天の内を  
九月廿日御の上院なる物存候のりは及の  
的て及の寛政元年九月十日御檢上院  
女物なる候のりは及の同奉八月廿日御山院

○同年二月晦日死後七年日命を壽

又一篇

時親

本永六年七月十日卯辰在法性院の同寺  
二月廿二日卯辰... 麻上院之五坊...  
クハ九物之度... 同八年... 育心堂大の  
上院... 及名河... 同年...  
六日... 九勸... 天... 之... 年... 六月... 日

寛治の同年十一月七日... 九勸の同寺  
二月... 下... 坊... 始... 時... 後... 之... 年... 十一月... 廿... 三  
枚... 七... 日... 之... 度... 同... 寺... 之... 宮... 院... 公... 年... 九月... 廿... 日  
家... 持... の... 同... 年... 十一月... 十日... 卯... 辰... 初

東照宮御代



清水

源姓

家紋 中藤内水字

三つあし

本宮義仲十八代上松二帝二帝孫人  
義重河内尾別知多郡小川城是権  
之助政妻初清水と稱ととと子

権物

波仕九信

改晴

始今川家尾尾忍小川城之事

弘治を中義之と減回家と合戦の時大  
 なる城と書く切行弘治より水原之寺  
 の方威状に毎陽より義之没するに  
 東照文もまた救方の戦傷に依りて  
 二年老と書くは日永十月九日  
 菅光の料りより多事と物九信に及  
 日永年八月又日死歎を自ら家奉に  
 別酒大政中山村九信院に葬

長政

檀物

實念田之席右軍九次二男

若子家活五月洋と父の

東照文もまた大坂あ方の陣に使者

と物

名徳没故に信守に日永八月の寛正三  
 年九月旨知行武子百石余の山判物  
 と物の日永年八月十八日死に檀物小

石川傳通院の遺書

長政大権位の御遺書の遺書

大猷院殿の御遺書の遺書

台徳院殿の御遺書の遺書

又山極附の御遺書の遺書

之御遺書の御遺書の遺書

形又上の御遺書の遺書

今尾法殿の家人の御遺書の遺書

之御遺書の御遺書の遺書

康乃の御遺書の遺書

権師

政利

増戸田久助貞右の遺書

吾子の御遺書の遺書

日知の御遺書の遺書

寛永六年八月の御遺書の遺書

家範山名門傳通院の遺書

改廣

権師

實之向久知貞吉

実家も在り河内信守時と云へ父を連切り  
知少の孫と

大敵度成河見りつと出尋うつふ之物  
しつと松守もく先は家絶ふは  
清も権師の政利の令中し中は清

目通へるおたる汗見りつと實見  
十七年九月<sup>十日</sup>河内信守時と云へ父を連切り  
権師の孫と云へる  
初号と云へる  
初の家も在り清も家の名跡と云へる  
くはえ知少の孫と云へる  
くはえ知少の孫と云へる  
初の家も在り清も家の名跡と云へる  
くはえ知少の孫と云へる  
くはえ知少の孫と云へる  
初の家も在り清も家の名跡と云へる  
くはえ知少の孫と云へる



總武人との取りかたの事  
安永二年九月廿  
日  
岩有流殿河内威の時  
西洲の九西野の地  
○之福久年七月九日  
波佐の月十年九月  
十日  
死に給ふ事  
外に  
西洲源寺の事

日記  
和名  
植柳  
六  
六

改聲

之福久年七月九日  
是の初見の事  
○  
安永二年十二月廿  
日  
東洲性廻の病  
死の事

○享保二年七月廿  
日  
波佐の月九年六月  
十日  
死に給ふ事  
外に  
西洲源寺の事

植柳  
初見

改水

実徳心教の親友の男

之福七年七月廿  
日  
波佐の月九年六月  
十日  
死に給ふ事  
外に  
西洲源寺の事

九聖書院書の同十六年二月百死候  
沙彌少名川傳每院中多奇

義水

檀和 初源右衛門六郎

享保十六年三月十一日家信山書信の  
寛保元年十月廿八日而九出仕廻り  
延享元年十二月十日身事大坂御所  
代寛政二年二月十八日出陣十月又御所

宝曆四年十月二日王子河津越え之て名村  
為同七日河津之取候の同一年八月廿六日  
元初の同一年十月二日山崎河津越え之て大  
の上院五物二枚候の同十二年十月廿六日  
上院の上院河津越え候の同一年十二月廿六日  
元九附の同十二年八月廿六日同組五枚の同  
年十二月廿六日布衣の安永元年四月廿  
六日山崎河津越え候の同一年十二月十八日而  
九附の同一年四月廿六日山崎河津越え候

○寛永十一年十二月廿九日、御解任人冬、御  
○同、八年二月十四日

濱崎屋敷河原、若狭の邊、時後之春、以て寛政  
七年十月晦日、死七拾二歳、牛之松源寺  
子孫

内記 和合之席

義厚

西和八年二月廿九日、初、寛政二年十一月

月九日、書院番の月四年四月廿一日、或  
湖上、修文坊二、春、以て同、七年二月廿二日、病  
死、七拾二歳、○十年二月十七日、死、以て八歳  
同寺子孫

檀之助 初之助

義和

寛政義和、御代

寛政七年八月廿九日、御代、義和、御代、同、年

八月二十日卯之日年十二月廿七日家傳  
山崎右衛門内九年一月廿七日出書院後番

駿河殿

清水 申付日 高百俵

後奈姓 家茂 九曜

戸田監物之妻次郎上野國沼田守  
少く清水の稱

駿河大納言殿と云ふは奥平守  
清盛去の後家茂後

又高右衛門

一政

寛永年中 駿河殿へ 高倉へ 奉  
初 出 遣 居 之 の 廿 八 日 人 々 之 後 別 遣 居  
在 之 天 和 二 年 丙 辰 廿 八 日 死 以 後 兼  
濱 府 所 御 寺 に 葬

一 幸

又 右 集

初 命 傳 へ 高 倉 へ 以 後 河 殿 へ 奉 矣

初 命 傳 へ 高 倉 へ 以 後 河 殿 へ 奉 矣  
丙 辰 廿 八 日 死 以 後 兼 濱 府 所 御 寺 に 葬

一 信

又 右 集 初 又 八 席

貞享 二 年 丙 辰 廿 八 日 濱 府 所 御 寺 侍  
又 指 遣 居 之 廿 八 日 死 以 後 兼 濱 府 所 御 寺 侍  
源 書 格 丙 辰 廿 八 日 死 以 後 兼 濱 府 所 御 寺 侍

扶持○享保二年七月廿一日死以程申歲  
約也天皇承子○葬

又右馬 和利持之助

自達

實松村十右馬良賢次男

西任又承七月廿六日若子○享保二年  
十月九日家智山寺高○同十六年六月

又日二瓦大番○元文二年同十月廿日  
病歿○享保二年十月廿六日死以程七歲  
泊也天林寺○葬

又所左馬 池西大番 又八

一秀

定享二年同二月二日家智山寺高信○  
室曆四年同二月廿七日若子大番○  
同六年同月十日若子高信同月○同八年

四月廿八日日光山法堂辻修儀の  
日九年六月十九日上修儀掛の  
二月廿日修儀の  
七月廿日修儀の  
詔を授けられた  
御解人受死  
九月廿日修儀の  
御の  
二月廿日修儀の

少善信方の  
本年九月廿日  
本年七月廿日  
二月廿日  
二月廿日  
二月廿日  
二月廿日  
二月廿日  
二月廿日  
二月廿日

三月五日午後五時中堂に相見候後掛  
の後水あぬの日は六年八月十九日<sup>甲午</sup>動定  
行くと用人を習ひて七年九月初九日  
を以て用人を習えの如く一日六年  
二月八日用人は月廿二日百俵に於て  
らるゝ同年二月九日大馬場で結婚  
存田安富殿へ  
將軍家御く御立寄りて奉物二紙  
の同年十二月十九日布衣

幸秀  
安富殿

天保二年四月廿八日初見



東照宮御書

○  
清水

書

家文  
有丸

清水宮御書

久二部

其

東照宮御書  
拾遺文  
別漢松島  
御書

此令之指費文納額目取通津村とて  
味言ふ系を別とす種 波別有村澤別  
俣川尾別山牧園の系四陣と信あり 高名  
りり

東照文より令の指字の之配りたれり  
柳系或は備康及び河合とて何方に出  
陣とて一とす或は外を備及河合とて一と  
作付とて一とす長久保年十月廿八日と云  
結核とて一と

某  
久九席

柳系或は備康改仕

某  
久三席

有は播磨と仕

重清  
全と仕

進可大酒之飯書流昔之後水并書  
孝文之仁

金三時

重道

水并書孝文之仁

海文左書

重利

好重  
水并書孝文之仁

百治二年二月梅園出殿之影之石  
北西被預書之廟東之百石在後之石  
乙未年十月廿八日死而後之妙壽寺  
子三并

市之丞

重徳

之祿二年三月廿七日梅田忠敏  
家持の事勅定之室水元年初四月九  
八日おし事勅定之室徳元年九月初  
病先の事保十三年八月廿六日死同  
寺守の事

久々也 波仕 体存

昌方

室水六年三月廿七日事保十年七  
月初園末物川通出書信事以也及の  
日十又年初家持の室水七年一月廿日  
夫死の事先何る也也書信入の事書日  
年八月廿六日死同寺の事

昌春

左内

實主監之會

年月。長子の定事之元年十二月廿日家督  
少當流の月二年九月廿二日少主人の明和之  
年八月九日病歿の由永二年二月又日  
死の程九景因寺に葬

直道

友之郎

宝曆二年十二月廿七日丑少人組の月十年

又月十日

悟伝流殿少尉兼清和九年初月二年

十二月廿日病歿の由永二年四月六日家

督の月三年四月八日死の程九景因寺

に葬

昌春

左内

安永四年七月

安永二年七月八日養子敬信少将

信の天保元年九月朔日死に於て其

日寺に葬

重明

久原麻

天保元年七月八日養子敬信少将

信の天保元年十二月四日皇子敬信少将

の安永元年十一月廿九日初九日九月

二月廿六日為丸少将人組

名徳院殿御代

○清水

有京性

三〇武百松六信

家茂九七七遠七齋七齋七同七

先祖祥あり

次席大馬

某

名徳院殿

大融院殿之出給以の去安二年

清揚院殿之出給以の死年之知

勝之

勘五郎

年月、松田山成少、其後松田山成少、  
以後山成組の寛文十二年七月、  
死、東市願寺中、等之寺、

勝改

次席大進

寛文十二年、初、松田山成少、  
其後松田山成少、  
之、  
二年七月、

勝仲

平八郎

寛文十二年十月、  
同、



葬

平田郡

勝清

實子大石常左衛門道房常吉

養子神戶口の家永正二年八月十一日家

後山常左衛門家保正二年四月十四日死

日寺葬

長太郎 初源之物

勝惟

實子大石友太衛門義龍之男

養子神戶口の家保正二年八月十一日家

後山常左衛門家保正二年七月十一日死

正和二年十二月廿九日病死の正和七

年十一月廿八日死七拾七歳日寺葬

惟安

織物 初書院

實設樂七九東山瀨次男

舞臺子海明○天の七年十二月廿九日

家譜山書院○月八年十二月廿九日

櫻田公敏



清水

源姓

二白松像少技持

家改 抱澤 二白鱗

孝口園便人清水太師在書山次男

七席外書院

正勝

孝長二年在別漢松合寺々々松の

筆匠飲下中用一町々々知々知知

死年月々々々々

市之場

西慶

加賀山和申納子仁死後...

惣古事

改元

江戶住居海人々寛文四年二月廿日  
至六年二月末初申納守...

惣八節

改元

貞享二年十二月極田信田殿出被及より  
初より極田信子介持○之儀十年上  
月廿五日改加納之儀○享保二年  
二月廿七日改被及○同十一年八月十二日  
伊予方調役在國許用改之知在  
○同十一年八月廿七日改被及儀同古  
子等

久委

承久席 和久兼助

享保二十一年十一月八日家持出書信の  
之文同一年四月廿七日家持の書に寛保之  
年十一月廿九日支能勘定之の定意二年一  
十月廿八日同國中國勘定之の定意八年  
十一月廿八日同勘定之同一年十二月十六日同定  
而留及の同十二年十二月六日同出觸書田用と知

白旗振振る候の同十二年十一月廿一日同家  
那重りの同和四年二月廿八日常々  
お精まつり列候の各名をいへく中納言殿り  
四下りし神上下おね候同八年十一月廿  
大徳の候一階りし同和二年七月廿日  
長柄の候り兼小書持候同十二年九月  
八日大徳の候逝去一月同和同候り同天  
同七年六月十日同慶と遊候同和同候  
おつり同和同候り同和同二年四月

二百五十八年九月十日死七拾二歳同寺  
山葬

篤則

熱八節 初力又節  
後 宗休

寛治十年八月廿九日没  
年四月十八日 寛政元年八月

女六日病 籠居

庫古 初 玄部

久知

寛政元年九月廿二日 堀原殿 祖  
年十二月十八日 初 寛政元年八月廿  
九日 堀原山葬

大猷院啟



清水

源姓

三上格依少校持

家茂丸内同持

清水又扁頼急流流了同國使

清之清定其長男

三上九席

定道

正保二年四月五日

持持出書不方同日年又月

常憲院致附の宣文二年八月神田出放  
山崎定隆死詔武山原出放の宣文八年  
月九日

淨徳院致連の宣文二年六月一日  
小宮信隆の貞享元年十二月廿七日  
○元禄八年八月廿日死七指之盛法  
友新堀堀首徳守子孫

新大傳

定考

宣文六年九月神田出放山崎信隆  
八年九月廿七日天和二年二月小宮信隆  
○貞享元年十月廿七日出放山崎信隆  
十二月廿七日山崎信隆出放の宣文八年七月  
月廿七日山崎信隆出放の宣文八年七月  
廿七日山崎信隆出放の宣文八年七月  
月廿七日山崎信隆出放の宣文八年七月

十月五日死六十二歳因守と尋出乃  
新古馬成及和科の字と七指依或人  
技持るる月日未詳なりと

李之助 波仕松山

定暉

右并之屋敷の家系  
實地は檀吉馬景平次曾  
室永之奉七月細賀長子之原

九年十二月七日家督小善信の四年  
二月八日死九歳大書○日十又年十二月  
廿六日死九世位同好の慶享元年八月廿日  
二月廿日死源書○日五年二月廿日源浦保  
書○定憲二年細致仕の家曆四年  
九月廿八日死六十八歳因守と尋

定寛

新太郎





正勝

寛文二年

寛文二年



清水

源姓

高橋源次

家紋丸角之拍

本曾義仲後亂清水之庫正俊

又代

社名

正勝

寛文二年

信守の家水二年十月十八日死

秋正種寺と新

正像

友方連

元禄二年九月正統の宝曆元年一月  
又自死

理多場

正種

正徳二年九月正統の享保十年四月

能知寺弘通の記

致

角折安之文古

相

寛永遷り相鐵田

右府と賜りて

新正統の正統二年八月正統の享保十年四月

正統二年九月正統の享保十年四月  
正統二年九月正統の享保十年四月  
正統二年九月正統の享保十年四月

正統二年九月正統の享保十年四月

正統二年九月正統の享保十年四月

正統二年九月正統の享保十年四月

正統二年九月正統の享保十年四月

正統二年九月正統の享保十年四月

正統二年九月正統の享保十年四月

正統二年九月正統の享保十年四月

裏面白紙

能久皇子弘通の御

致

角折寄の文書

相

寛永藩より相の儀内

右府より賜ふなり

伊藤日記に修理亮近孝信長の事云く元禄  
一 相の致と云ふは同族同姓をりとの事なり  
相の致と付る事ありと云ふことなり  
少後ハ伊藤の家切と云く伊藤と云ふも  
用と云ふは後方の事なり又伊藤家も  
此等し皇孫と相の致の事と云ふ事  
ゆへあり



同平九月武元初撰拾地〇月八年二  
月武元九月武元初撰拾地〇月八年二  
拾地〇月八年八月武元初撰拾地〇  
元文元年二月武元初撰拾地〇  
元年十月武元〇武元元年八月武元  
元〇拾地〇月八年二

長年

元文元年六月廿二日武元初撰拾地〇  
元年十月武元〇武元元年〇武元  
安永元年四月廿二日武元初撰拾地〇  
子孫

西行

理多清 初修版

義陣

元暦元年八月廿二日武元初撰拾地〇

年十一月七日...  
 十月廿八日...  
 定...  
 法...  
 又...  
 二月...  
 二月...  
 二月...  
 七月...

義長

實中村道務法久男

天明又年十月...  
 八月...  
 川...  
 川...  
 八月...  
 八月...





有徳院教冲代

浪谷

高二十石



藤原姓

胤紋

上家萬



美作少将左京亮史秀高浪谷  
幼作其長男

父左馬

重次

父幼作西行院館内封死可成  
母と其小安藝国小院庄○浪子

之方、武藏川金吾乃妹也  
 秀林家劉滅、後於伏見、  
 東照宮、被、不出賴宣、  
 同九年二月常、七百、  
 後年、八月八日死、  
 相尋、心、感應寺、

重正

文大集、  
 波仁如者

父重正、家督、  
 如方、貞享二年六月、  
 死七拾歳、同、

重信

市本集



父重信、  
 六百、  
 重信、

當廣

文友集

波仕古直

父重正家督紀元持之國以○後右  
古友○言保平可平七月十日  
死七拾九歲因名○每

虎之由 建敷右衛門 隱岐守 和氣守 海守

長信

有意院殿紀元之遊 沖野守以記名位

也之沖野守也○出雲守兼

晦日沖野守元正入公家以所自連  
同平一六月廿八日父初以高道  
六百石下也國都加功也保領  
也沖野守材二百俵給沖野守○言  
保九辰平十月十八日新沖野守以諸  
太史隱岐守と改○同十己年七月信  
有德院殿的場野と為沖野守也  
沖野守と以沖野守也并兩沖野守  
也之勢也子之沖野守也兼身也

良信も沖原に去る所元  
自らの見盡す時給に鞍置所供仕  
旅中場良信乗の馬居元也  
之為石分  
之意あり則良信乗の鞍置所  
儘にあり之為石良信の  
沖原に去る所元  
之を證する事一終り沖原に  
去る所元  
以彼國を元

之為石替後時々面目を知らず  
雲仍右鞍置所元  
○同十八年正月十日沖原に  
武十四日石沖か増部合二子  
○同十二年四月日元沖社  
報二百枚林に及ぶ  
この中石分  
浪を渡輪し沖原に  
○同十九年  
○同十九年

月二十七日相承守俊（父）延喜五年  
七月二十日城守（父）寛延二年九月廿  
七日相承守俊（父）東波の御書札  
宝曆三年

有徳院殿 寛御七月十日相遺物所  
一腰物近江守源公道伴（父）外孫  
同月十二日相承守俊（父）縁頼法同月廿  
相留守居○宝曆二年四月廿九日  
病欠守合同年十二月公認持

切手又白紙物○同延喜五年四月廿  
死七柱之蔵江公認持守（父）孫

相承守俊

俊承

延喜二年六月十二日死紀  
相承守俊之戒應守（父）孫

下名守俊

相承

伯父の対浪人の宮保十八年  
二月十日死に公戒の寺に葬

恒質  
文太事

有忠院殿 卯年九月に為入所  
恒質の母は四男恒質の母は○室  
二中年十二月廿七日死に公戒の寺に  
葬に感應寺に葬

良譽

公九郎

宮保十巳年二月廿八日所  
病に付歎に公深の室屋下三  
未年十一月十日死に公戒の寺  
葬

良紀

西依 采女心 院改寺

享德元年七月廿日次男物成。  
之文四未年十一月十日初見。  
寛保二成子十月廿九日中興洲小姓  
○延喜文之子年十二月十六日諸吏  
采女心○寛延之辰年十二月廿日  
洲小姓原采女百依○寛延四未年  
七月十日洲遣人金百兩、小行取也  
仕同月十二日守名○宝曆之未年  
十二月八日山法法古跡武守、水邊

良記、助取、又、中切、又、百依、為、徳  
治科、又、良信、賜、同、七、之、年、十、月、廿  
中興洲小姓、同、十、辰、年、十、一、月、廿、日  
徳政守、少、成、○、同、二、成、年、八、月、廿  
西丸洲小姓、組、番、取、同、六、也、年、三、月  
十、日、洲、書、院、番、取、○、安、永、四、未、年  
九月、駿府、在、多、九、月、初、日、洲、目、見  
至、又、牧、時、後、二、洲、羽、織、裨、履、也、年  
十月、廿、日、海、府、洲、目、見、同、七、也、年

又月部の紀云(沖波)同十又(沖波)又  
金柱牧禰の天の之也(年)五月  
伊の如丸(沖波)書流(多)以(同)年(室)各(各)  
衣(衣)極(沖)附(の)寛政二(成)年(月)二(日)  
沖(書)流(多)以(の)同(二)年(月)六(日)初  
又(人)寄(合)の(同)月(廿)日(死)六(拾)七(歳)  
同(身)一(身)

良寛

豊(不)評 兼(女) 縫(教)師 寛(九)所

唯和三年八月廿七日(初見)○  
寛政二(成)年(月)六(日)初(見)○  
寛政二(成)年(月)六(日)初(見)○

松(子)郎

良載

寛政六(成)年(月)廿八(日)

若(表)極(沖)宮(各)子(持)馬(持)○(同)身

い(身)一(身)

公(方)極(若)表(極)入(初)身







大猷院教訓通淨院下今本内侍

直懋

長怡法眼 久三郎

寛永廿一年八月廿三日  
在國府氣遠寺建立約百十二度由初  
元文十一年二月十日  
○同十二年十二月廿七日法眼○延宝七年  
十月廿七日法眼○元禄二年十月廿七日  
十一歳高死門寺葬

年同日記

嚴有院被淨画在院下今本内侍

直治

通玄院法中 松軒 八十郎 直怡

寛文四年八月廿三日  
同廿七日家信多合○同八年八月廿三日  
系後在院○元禄二年八月廿三日  
府存金二枚河後二枚○元禄六年十二  
月十八日法眼○同九年

本院神帳有九月十九日家上之令二枚在帳

聖母日記之○同日共字入帳

院系奉珍 天脉清源進執儀之記

本院神帳<sub>下</sub>新仙經冊及白根本枚在帳

新仙經冊與書

右字二人新合經冊記

本院賜醫所滋江松新筆者目録

院室中納之類重本書之最可傳家珍

子孫者乎今依經詳定聊記之旨也耳

權中納之意先

同本十月廿八日席語○同十年十月廿日加秩

百俵約合相与二百俵十人持持<sub>下</sub>○

宝永二年九月廿六日

常憲院致清源君上之令二枚在帳

○同二年八月廿六日法平○同七年十二月

十方世所<sub>下</sub>百々<sub>下</sub>家業五励<sub>下</sub>名<sub>下</sub>俵<sub>下</sub>詞

と家<sub>下</sub>已<sub>下</sub>令<sub>下</sub>之<sub>下</sub>枚<sub>下</sub>付<sub>下</sub>帳<sub>下</sub>○<sub>下</sub>正<sub>下</sub>徳<sub>下</sub>四年

三行

月之流敬也 兼名上在能也 ○同年十月  
 十八日大更初に任有以材料或曰俵不且病  
 務無事より勤業所へ ○享保三年正  
 月廿六日松浦家医業出群今世に於て  
 是の業と勵之に任用可為者要る名象  
 以褒詞 ○同四年十月十二日群出所へ  
 人委淨院 ○同六年十二月廿日熊鷹白屏  
 南洋院 ○同七年正月十九日松浦納戸孫和  
 兼冷味五任有 ○同九年正月十八日新野全

業後可長必味と命をいへ ○同十二年  
 二月廿日松浦より中判院致来兼業精  
 勤有褒念三枚下止致あり是迄名に任有  
 ○廿外遠来市用致九夜毎交り褒義を成  
 ○享保二十年正月四日死半云来日与蘇  
 年月々々知  
 常憲院致より神環九重く番坊派市画を成  
 有徳院致より市画致市経濟所兼致を成

直署

長怡法眼 八十席

宝永三年二月六日医業勘務并改御任り  
 多石原米武百俵奉合〇正徳元年十二  
 月廿九日医業勘務并改御任り〇同元年  
 十一月廿九日未年四月  
 東照天皇御神代御宗祀御用下御初名〇同元年  
 二月十二日日光准后御用兼常御所并同月  
 廿四日御令是改御任り〇同元年四月廿八日改

福〇同元年二月十二日日光准后大御院  
 上京御任り〇享保十年二月廿二日海山御  
 武百俵〇同元年九月  
 大御院御任り御宗御任り〇同元年十二月廿八日  
 法眼〇同元年六月  
 洋園院御任り御宗御任り〇同元年七月廿五日  
 御宗御任り〇同元年七月廿五日  
 洋園院御任り御宗御任り〇同元年八月廿五日  
 廣根御任り〇同元年七月廿五日〇同元年八月廿五日

遠國法用之度○二月廿六日十二月廿五日卒  
多死同寺に葬

胤武

松軒 松慶

正徳元年十月十九日初見○享保十二年六  
月六日婿原兼祖壽合○元文二年八月廿  
六日卒○宝曆十二年十月廿五日  
卒○明和二年六月廿五日死○年八  
寺に葬

胤胤

長怡

寶曆元年閏二月廿五日養子○同年十月  
廿二日初見○同十二年十月廿五日卒  
○同十二年六月廿五日卒○享保十二年  
八月廿九日死○年八  
寺に葬

陳胤

松軒 順菴

実名 沖見之医師 中村順菴 集三男

明和二年十月号急病女子在信女舎○  
同和十二年庚子初九○安永二年六月十日  
毛筆教所上○同七年三月廿九日卒  
同寺葬

此

長伯

実名 沖見之医師 吉田之達 惟長四男

安永七年二月廿七日女子○同八年四月廿  
日信女舎○同九年二月廿七日醫學館  
所為福書了信名○同年十二月廿日身信  
○同月廿七日沖見園了り○同月廿七日  
醫學館福書了り信接取了り○同二年  
二月二十九日製茶所見了り○同年六月廿二  
九日製茶所了り○同年六月廿七日三九日  
明地の新規沖見園了り之口操口扱上云





九月廿七日御用由勅歸府○同日十月廿日  
御用由行所方○同年十二月廿日又奉  
御用由紙山用向相叙の并時及二上外注叙  
○御用由用由初の并存賜之

*[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]*

横田行及  
法江

平姓

三三首儀

家紋  
云凡内唐花  
遠存所  
根杏

法江通玄院法平直治次男

胤直

名之部

之部十二年十二月十五日御用由  
横田御叙表平姓切末式百儀○家承之



三年同国女上之信より、忠誠之志の上覺  
海潮一及○延享二年同十月女上之信の上覺  
上覺の信二○宝曆九年十二月女上之信改  
上勅上覺全武校○昭和二年十二月女上死  
六十二歳同寺葬

深慈次 孫の物

直近

実者酒井新右衛門忠實三男

寛延二年四月女上之信の信子○昭和二年二

月女上之信○昭和二年二月女上之信九歳  
信子○昭和二年十月女上之信九歳○寛政三  
年二月女上之信六歳同寺葬

新の物

直彰

始直淳

実者藤本六左衛門淳房三男

安永二年九月女上之信の信子○寛政二年  
四月女上之信○同二年九月女上之信同分○  
同二年、女上之信中室の用屋女上高馬上覺

○同九年九月其子...  
○同九年十月其子...  
○同九年十一月其子...  
○同九年十二月其子...

東照宮御代



浪川

高武百六拾像

源姓

家紋

丸内五葉度花  
五ッ松皮菱

島山掃摩磨書我照次男島山九郎

滿安後改  
滿貞八代

算哲 卅六花

次吉

東照宮御代圖卷三 延正 延正 延正 延正 延正

府園基備名覽

东照文以之徳角の妙子常侍在右祿  
之拾石十二人扶持揚下之坐也。其又安又年  
正月九日改築二十之

春海

保并 助乃出 如 算哲

嚴有院殿初見之。兼魚二年又算哲自

下之坐基所扶持也。

常憲院殿沛代助乃出。以天文曆字功

者達上聞貞享元年基方沛免天

文沛改扶持百天拾儀并下之坐也。

○元祿又年四月十八日米坂扶持也。

保井勉在坐之。改。○同九年十二月又日

沛殿一事。沛願天多取沛約。○同十年改

曆沛用。○同年十二月十八日沛加增扶

百儀於合式百天拾儀。○同十二年七

月晦日沛儀袋。其沛卷物。又老沛儀

同十二年九月十九日改。○正徳元年

十二月十九日即位○同日辛未十月六日  
元祿五十七歲品川東海寺中玄性院葬  
元祿八年貞享曆通書

星圖

天文瓊統

貞享曆

天球

右春海著述製卷也

圖書

音尹

正徳元年十二月十九日家督天文方○同叙

三月四日北之拾之葉同寺葬

右門

敬尹

基所

實安井智哲某男

正徳五年六月廿六日養子天文方○享

保十一年四月十日死、二拾一宗同寺葬

圖書 市十師

敬也

松平隆興の墓

実入河川利彦清友之男

有徳院殿清代松平隆興の家系入河川

利彦清子市十師自<sup>り</sup>以<sup>り</sup>養<sup>ふ</sup>又<sup>り</sup>右<sup>の</sup>病

言<sup>ふ</sup>之<sup>を</sup>清<sup>用</sup>勤<sup>意</sup>之<sup>を</sup>以<sup>て</sup>六<sup>花</sup>を<sup>効</sup>少<sup>く</sup>

付<sup>し</sup>先<sup>に</sup>法<sup>門</sup>助<sup>成</sup>之<sup>を</sup>以<sup>て</sup>心<sup>を</sup>養<sup>ふ</sup>也<sup>と</sup>也<sup>と</sup>享<sup>保</sup>

六<sup>年</sup>八月四日<sup>未</sup>子<sup>〇</sup>同<sup>十</sup>一年七月  
十八日<sup>卯</sup>子<sup>〇</sup>同<sup>十</sup>二年二月晦日死  
四拾<sup>一</sup>宗同寺葬

別休 六花

天文方

実法門右門敬尹男

享保十二年二月廿九日<sup>未</sup>子<sup>〇</sup>同  
年六月十二日<sup>卯</sup>子<sup>〇</sup>同<sup>十</sup>二年<sup>天</sup>文<sup>方</sup>寺社<sup>を</sup>以<sup>て</sup>葬



祀<sub>三</sub>後<sub>一</sub>○延享二年十月四日補曆  
津用七人技持<sub>三</sub>不<sub>一</sub>並<sub>三</sub>若<sub>一</sub>年<sub>一</sub>支  
配<sub>三</sub>成<sub>一</sub>○寛延二年八月廿四日死  
拾一歲同寺葬

長書

孫以師

光洪

天文方

實浪川右門敬平男

寛延二年九月十六日<sub>後</sub>同<sub>後</sub>年十

一月十六日測量津用七人技持場○同四  
年四月七日京都測量津用<sub>後</sub>取<sub>後</sub>技  
術同十又自書立同廿六日京都<sub>後</sub>津用<sub>後</sub>  
勤○寛曆五年江戸表秋分測量  
津用付同年七月七日京都出立同  
十八日江戸<sub>後</sub>津用<sub>後</sub>勤同年九月七日  
江戸出立同十九日京都<sub>後</sub>津用<sub>後</sub>勤  
同年江戸冬<sub>後</sub>測量津用<sub>後</sub>十月十又自  
京都<sub>後</sub>立同廿又自江戸<sub>後</sub>津用<sub>後</sub>勤

○同永十二月廿七日京都改曆清用  
相勤以付令又放賜○同六年正月  
八日京都測量清用翌九日江戸  
同十四日京都之清用相勤○同  
又月十八日京都測量清用相勤同  
六月之日京都出立同十四日江戸  
○明和八年正月廿九日死四拾九歳同  
寺葬

正清

主水 後次郎

鈴木清心少輔組下使組次

実川源次流清男

明和八年四月六日養子家茂天守○寛元改  
四年右田頼貞心次也助清試曆書  
撰述著作付の長右清書之有栗村  
郡古史也人江著作後相徳○同九年  
十二月廿七日改曆清用付先祖旧記未九

調旦新曆法稿を以相認許後銀  
不枚賜○同十一年六月十八日死又拾八  
兼同寺抄葬

富又平 略出節

正陽

深尾公史能法元

実川日若丸邊の春芳男

天保七年六月十九日養子○寛文改十  
十月四日定終極天文言

東照宮清成

同 臣谷

言部拾人持持

友系姓

家茂 病在  
ニツた也

中野園臣谷名郡川邊城自塩谷氏經  
左補賴忠志代之間在事今賴未孫

友堅

某

東照宮文休是清中城の時在湯○寛文十

三年二月廿七日死八十歳  
源海寺の葬

来

友昌

東照宮攝府沖田左衛門尉父となるに  
常業の職ありて湯の宮となりて三年二月  
朔日死六十歳同寺の葬

宗定

柳庵

駿府醫局の少の藤治が精となりて家  
十年の抄にありて武の人持持の年月  
多府の湯の宮となりて三年四月廿七日死  
六十歳同寺の葬

定清

柳庵 初治房

在木身方  
實相寺住持(末田)

九年九月月名子  
之原十二年七月九日  
付生一〇月八月八日  
十月十八日  
每度少記也。之文  
仕在德根格校納  
死七年七月

友新

貞良

實相寺住持  
之文  
死

柳菴

定真

寛延之元年二月家督の同年七月  
糸府お堀の寛政之元年八月廿日  
寛政之元年

柳店

悖

高野山末路府  
寛政明泉寺末路

寛政二年七月十二日柳の店  
の寛政之元年八月廿日家督の同年

十月約日糸府お堀の同年九月廿日  
柳の店に柳末路の店



叡有院教

塩谷

藤原姓

高之拾

家次

從持院下拾高  
破車夕後  
輪遠

大職冠錦是後亂定津宮高尾村

成堀次男兵衛村業朝下和國塔

郡領始号塩谷業和若孫日向守

義继次男任兵衛保真之男

又去條

保正

叢有院教清代於櫻田清教為組

正正出在動年月日不知死葬化

石洋

永願平八節

台正

丑年身平身一可名字永敬及

貞享三年朔於櫻田清教

清腰方同公○元禄九年

月日不知組次○同十三年日知

清譜代加秩之後○寶永元年

文昭院教西丸正為入公在清代○六年

六月廿一日死谷中妙情寺葬

塚谷八更

明正

寶永六年家督西丸清腰方

同公○同年七月清腰方



方恩○元文二年九月十三日  
支配勘定○延享二年二月  
八月六日取御城内八石公取並延  
御用○同三年正月十三日御復  
共金貳拾兩○寛延二年正月  
廿四日御勘定○寶曆六年  
正月十日御林并○同七年  
七月廿六日北六十六米同并

平四席

奉正

寛延三年正月十六日御勘定  
御勘定○寶曆二年正月廿日  
同東勘新田檢比御用○同年  
正月十三日御勘○同四年同二月  
同東若田一村檢比新田檢比  
御用○同年正月八日家督○  
同年正月四日同東勘甲州勘

濃州執州門ノ沙會法用○  
 八年七月二日御慶次時後二合  
 武牧○明和三年二月廿六日  
 濃州執州門ノ沙會法用○  
 同平七月十日御慶次時後二  
 合武牧○安永六年年正月十日  
 道筋濃州執州門ノ沙會法用○  
 同平○同平七月二日御慶次  
 同平○寛政元年正月十日濃州執

門ノ沙會法用○  
 同平六月十八日御慶次○同  
 平四月十四日老免小在會法用  
 浪指牧○同平正月十七日北七十  
 七葉同寺ノ一葉

心澄

大田出雲与家来成

秀之勅

正房

安永五年壬午月廿日敕命任公出勅定  
○天明六年丁酉月廿四日死

淡之勅

集

平四郎奉正實子惣領淡谷秀房  
正房病死年續孫兼祖天竺宗  
上<sup>七百</sup>月<sup>七百</sup>日<sup>七百</sup>終身以公同七年九月八日死

秀五郎 大四郎

惟寅

實業津又公孫清香次男

天的八年壬午月廿六日解養子

○寛政四年壬午月廿六日敕命任

公也<sup>七百</sup>沙<sup>七百</sup>勅<sup>七百</sup>定<sup>七百</sup>○同七年九月

廿七日奉命公家流御贈向御

取<sup>七百</sup>錦<sup>七百</sup>御<sup>七百</sup>用<sup>七百</sup>○同七年九月廿六日

復<sup>七百</sup>浪<sup>七百</sup>女<sup>七百</sup>收<sup>七百</sup>○同六年十月七日

同日御用○同年七月十六日  
復銀六枚○同七年三月朔  
右同日御用○同年四月廿四日  
復浪六枚○同年八月三日家  
督○同八年六月廿七日御定  
吟味方改改○同年二月六日  
日光  
御宮 御靈金其外湯使後御  
用○同十年六月御使後御成

然  
御宮正遷宮 御靈金正遷座所  
式相承同年六月朔日御端○  
同日太日復金改

*[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]*

常憲院  
言三百後



垣入

藤原姓

家紋

八双梅實  
在之同様不元

須守府將軍秀郷後胤垣入

皇太子嫡子垣入令皇孫皇孫嫡子

垣入令皇孫皇孫嫡男

垣入次第

皇孫

慶安四年十月朔日別格

正出

常憲院教御代之之元為

庶所小京御帳面之元為

法切未百之拾儀米少支地

寬文四年十月廿二日於神田

法切未百之拾儀米少支地

延寶二年正月十日法納戶

元○同八年十月廿六日

淨德院撥西元

於西元法納戶○天和元年

七月十日法納戶觸氏○同

二年九月廿二日御在元

同法納戶○同年十月廿二日

法納戶觸氏○同三

年九月十日西元元一統小

貞享四年十月廿二日

同年十月廿六日

○同年九月六日由小納戸造  
 加増百四拾俵改合高三百俵  
 ○元禄九年六月廿七日  
 沢相不知通巻○同年十月  
 十八日通巻御免同日○  
 同七年十月九日大津藩○同  
 七年十月二日死六十六歳  
 丸山菊坂町長泉寺葬

正勝

ニサカワ  
 正勝

實垣入合云云重秀次男

常憲院致所代又方伯大垣合

云云重良実子云云重秀次男

兄垣入 後合云云重秀次男

云云重良実子云云重秀次男

三年十月十日解卷子○同

九月六日初見○元禄七年

十二月八日家督小治子  
 十三年正月九日大津藩  
 保六年正月十日御代  
 者之次  
 同九年正月八日  
 病免小治子  
 同日死六拾七歳同寺葬

源太郎

良寛

実徳入次郎

元禄十一年三月十日養子  
 同十二年六月八日初見  
 寶永六年四月六日大津藩  
 享保十六年六月十二日  
 上り養子  
 同十年十月八日大津藩  
 三十九歳山小徳壽光寺葬



正寛

長之助

享保十六年十二月廿七日家督

小菅重徳○延享三年六月十日

初見○寛延二年八月十七日

死式拾九歳中乃丸山長泉寺

葬

惣次郎

寛利

實増入海之丞利貞次男

寛延二年六月二日同姓又嫁

後之丞名養子家督小菅重徳

○寶曆七年六月十八日太政官

○天明三年九月十日病免

小菅重徳○同年六月十日病免

○同八年十二月十日死六十八歳

同年葬

寛方 ヒロミナ

次郎去侍 娘然右郎

天明三年十一月廿九日家督小  
尊請 ○同四年六月廿八日  
大出書 ○寛政元年十二月廿  
新出書 ハ 御書替 ○同二年上  
月廿二日病免小尊請 ○同  
年四月七日隠居 ○同六年  
七月五日死 四拾三采同寺 葬

常三郎

利至 トシユキ

實地入地次郎 寛利次男  
寛政三年十一月廿六日才養子  
○同四年四月七日家督小尊  
請 ○同年九月廿二日小尊請  
一統所自見

*[Faint, illegible handwritten text, likely bleed-through from the reverse side of the page.]*

東照宮御代



垣入

藤原姓

高木百右

家紋

輪寶  
色目板丸

田原夏太秀郷 後胤垣入日白守

高木秀郷男

金三信

重信

天正十年信州執所日白守

其田右衛門 守之

東照宮為る事厚恩ヲ奉家成  
之ニ至三(三)即味方ノリ上  
御内通ト上並山垣入金去(去)其田  
属兵共五拾騎同身右同年

東照宮甲斐之新ノ所ト御出馬  
遊公右左衛門守之徒信別 伏久  
春日村之真見澤ニ山小屋ニ  
五拾騎之者一所ニ三ヶ年為リ

兵在山上沃を大敵有る事大史  
小勢を難防し身山小屋人倫を  
下ニ隠れ兵を兵糧を貯

東照宮遠別 濱松ニ成 御免  
一夜ニ山傳ハ内通ト上時  
と相待至且其後山小屋と出  
不意に攻拂リ一月伴野登保  
ヲ攻取若尾ノ城ヲ攻取ルハ以節  
右衛門守之討死信是ヨリ信員

沛子入戶口其後在處大吏舍  
才修程多跡式以修牙信泉  
小室之城之在戶口金云清溪之  
飲理多屬在處其已後上民  
而修理多討死仕舍才處於  
跡式以修牙以金云清溪之  
屬在處以在處跡不意之  
有之子野山之退戶口才家  
斷後金云清溪之在處者九所

上品夜周之由知行所引  
居在戶口以修牙以金云清溪之  
左邊仍籠城仕舍才處於  
右之節目在處長之

東照宮在戶口即自是之節

金云清溪領北百貫以下在

台德院教在處附同年七月  
本國之領以佐州真田長  
御書內在處之領真田落城

敵方之城彼却徑直上青  
信守以同年九月濃州國守  
御陣中多依彼守組守法依仕  
寛永八年十月廿九日  
葬比不知

金三清

重成

台德院教奉仕慶長十九年  
十月松州大坂御陣之長年

依彼守組守法依大坂御陣  
御守陣之長年依彼守組守  
法依仕  
寛永九年十一月廿九日  
葬比不知

群林九年二月

駿河大洞言教所逝去後寛永

九年十一月廿九日

葬比不知

大猷院殿ハチノミ 在均法持方治  
 武烈八王子、正正山○同十六  
 年一取来山所按持方百五拾石  
 之言ニテ 正正山ハチノミ  
 五拾俵ハチノミ 正正山  
 百石ハチノミ 知行  
 富士見山室ハチノミ 正正山○同十七年  
 二月十九日上総國長相部ハチノミ  
 村ハチノミ 知行百石ハチノミ 知行ハチノミ ○  
 寛文六年正月十二日死六十八歳  
 正正山長泉寺ハチノミ 知行ハチノミ

金太夫

皇<sup>テ</sup>秀<sup>テ</sup>

寛文六年三月十日家督○  
 同六年九月七日富士見山室ハチノミ  
 ○元禄四年六月七日死年  
 七歳ハチノミ 知行ハチノミ 蓮成寺ハチノミ 知行ハチノミ

次席太夫

皇<sup>ニテ</sup>良<sup>ニテ</sup>

慶安四年十月廿日新観ハチノミ 知行ハチノミ

付家勅當時小宮造地渡是年十  
ふ配位入常三郎公書上

甚五席

重武

寛文三年神田清俊は正出

小十人組

石玄法 幼名伏平次

祥重

之祿也年七月太司家留連

富士見御寶藏番○同十年  
因二月十九日桐之間忠番○同  
年三月十日大出番○同  
○同年三月廿拾後高加増款  
合式有るを以て○享保七  
年二月七日死五十八歳同寺  
葬

源五郎 四郎五郎

利貞



實塩入金<sub>三</sub>陽重秀<sub>三</sub>男

寶永二年正月兄塩入金<sub>三</sub>陽養

子○同六年四月六日初納<sub>三</sub>領

大<sub>三</sub>高<sub>三</sub>者○享保七年五月

二日家督○元文四年八月

十九日隠居○同年十月五日

死六十一歳因寺<sub>三</sub>一<sub>三</sub>家<sub>三</sub>終

金<sub>三</sub>五<sub>三</sub>兩

利<sub>三</sub>奉<sub>三</sub>

實塩入金<sub>三</sub>陽祥<sub>三</sub>重次男

享保七年八月三日○元文四年

八月十九日家督<sub>三</sub>小<sub>三</sub>高<sub>三</sub>徳○同年

正月九日大<sub>三</sub>高<sub>三</sub>者○享保七年

九月十二日高<sub>三</sub>腰<sub>三</sub>拘<sub>三</sub>方○安永元年

二月廿九日死六十四歳因寺<sub>三</sub>一<sub>三</sub>家<sub>三</sub>終

大<sub>三</sub>三<sub>三</sub>兩

利<sub>三</sub>奉<sub>三</sub>

明和九年閏上<sub>三</sub>月<sub>三</sub>十六日<sub>三</sub>執<sub>三</sub>術

清外味之上被包領分年 白出大  
清者○同七年四月二日大的  
上覽時後二○同九年二月大  
九日大的 上覽時後二○同  
年六月五日家督○安永  
四年十一月十九日九也 上覽  
端約二○同六年二月十六日  
大的 上覽時後二○同七年  
九月廿七日圈的 上覽端約二

○同十年二月二日大的 上覽  
時後二○天明元年九月十日  
圈的 上覽端約二○同三年  
正月十二日清多場始大的 上覽  
時後二翌十日合或後○同四年  
閏三月十八日小當後組組以○寬  
政元年十月二日清地依後多配  
組以之布相支配本清亮之助造  
吟味之上西仕重子 始有以之身

光祐元年 伯牙 ○同六年正月  
 十三日光祐御免 ○同三年  
 正月十三日小宮後組組頭  
 勤之七歳 ○同四年正月十八日  
 涉徒以 ○同年正月十六日布衣  
 ○同七年六月高日涉先子  
 涉徒以 ○同年九月十一日  
 大附盜賊被加役來辰三月迄  
 下在勤言 ○同八年正月四日

盜賊被加役 涉免 ○同年  
 六月二日又次大附盜賊被加  
 役來六月迄下相旨 ○同年  
 正月九日病氣身加役涉免  
 ○同九年正月九日死女十日葬  
 同寺下葬

富吉

利容

實之田宗孫為忠久三男

天明六年三月十六日算卷子

○同七年四月初見初見○寛

政五年三月廿二日丸物 上覧

瑞物二○同六年四月廿日卷子

光侯

大之部 四部之部 平次布

利勝

実田屋本在馬道政次男

寛政七年三月二日算卷子

○同年六月十五月初見○同

九年五月四日家督小巻徳○

同十年十一月二日同之既世後取扱

助下右助方志助 月勤仕在由改金

御免

文昭院



塩田

菅原姓

高百六拾俵

家紋

二重輪 白梅

是近九ノ月易者菅原氏  
内言引ノ山ノ及ニ重輪ノ内  
梅所引引九ノ月易者菅原氏

先祖野村敏中守世足利將軍任

天正元年將軍義昭公没落後新

家屬野村老玄清次男宗信正年

身母方苗氏塩田与改醫師也

成以敏中子只代

順菴 久工 久三

塩田宗信

寶永六年丁七月廿六日辰巳出

湯切米式百依迄

有章院致御附真醫師○正德

五年八月日不知寄合○享保

元年三月十一日死谷中長久院

葬

宗音

之景 二ノアケ

實 京都政醫師 原玄喜某三男

享保二年六月十一日初見年々

延齡丹獻上○正德四年十月

廿三日知年養子○享保元年

八月十九日宗信奉領龜公通家智

小童信○明和元年丁七月四日

死六十八歳同寺丁葬

景應 カケヨシ

宗俊 幼名 権之丞

年号 月日 不知

後明院敍 初見年 延齡丹整

○明和元年七月八日家督小

尊 ○安永六年七月十二日院

后 ○天明六年七月十三日卒

八景因寺 葬

景光 カケミチ

宗貞 幼名 辰之助

右宗貞兄宗俊男子 年月

日不知 中養子 ○安永二年

七月三日死

宗信 幼名 乙五郎

景保 カケヤス

實父 隆田宗音之景三男 年カケ

安永九年二月三日初見年

延壽丹獻上○安永三年二月  
 晦日才養子○同濟平上青音  
 家督小當後○天明七年九月  
 廿九日表御書醫師七名水菜種  
 洋領○寛政元年四月廿四日  
 病免小當後○同三年五月  
 十日限后

宗榮

治和

保定

寛政五年正月初見年  
 延壽丹獻上○同三年十二月  
 十日家督減添伝子百  
 六拾俵米小當後○同七年  
 正月廿二日家業出情子小當  
 清金御免





Faint, illegible vertical text impressions on the right page, likely bleed-through from the reverse side of the document.



